ほとんど触れられておらず，日本の都市地理学の概説書との差異を感じる。

いずれにしても，本書のような概説書は単独で用いて詳細な理解を得るという類の書物ではなく，興味のあるテーマを詳しく知りたい場合には，巻末に載せられている多くの参考文献やその他の最新の論文などをさらに参照する必要がある。総合的にみて，本書は中国や都市に興味がある方々にとって有益な情報を提供する1冊となるであろう。　（高橋健太郎）

文献

河野通博 2001 柴 彦威：日中都市構造の比較研究（書評）．地理学評論74(1)：53-54.

柴 彦威 1991 中国都市の内部構造―蘭州市を例として．人文地理43(6)：16-35.

柴　彦威 1994 中国都市住民の日常生活における活動空間―蘭州市を事例として―．地理科学49(1)：1-24.

柴 彦威 1999 日中城市結構比較研究．北京大学出版社，167p.

Je-Hun Ryu, *Reading the Korean Cultural Landscape*
（柳濟憲：朝鮮半島の文化景観を読む）

Hollym International Corp, Elizabeth(NJ)・Seoul, 340p.

表題に掲げた書名を，「朝鮮半島の文化景観」と訳しておいた。清州の韓国教員大学校地理教育科の教授である著者は，北朝鮮で調査をすることはできないので，本書でとりあげられている事例はすべて韓国のものであるが，著者は明らかに北をも含めた朝鮮半島の文化景観を念頭に置いて論じているからである。また著者は，北の事例研究がないという意味で，本書は未完の書であるということをはっきりと断っている。1980年代後半になってアングロサクソン諸国において主張されるようになった，文化を，そこにおいて社会関係が構造化され形成・再生産される様式と理解する新文化地理学のアプローチをも踏まえて，韓国の文化景観を体系的に研究した最初の書物である。それが英語で発表されたということは，自分の仕事が，文化地理学の国際的な議論の最前線に位置づけられるという著者の自負と，朝鮮文化に関する地理学的議論が国際的に活発になるようにという著者の希望を示したものと言えよう。著者はソウル国立大で修士号をえたのち，1987年にテキサス大学で湖南平野の文化地理学的・歴史的地理学研究で博士号を取得（その論文の一部は1994年に韓国語で出版されている）し，上海の復旦大学でも研究に従事した韓国の中堅地理学者である。

序文および第1章において，5000年の歴史を持ち，その社会的なコンテクスト，イデオロギー，権力およびヘゲモニー関係が複雑な朝鮮半島の文化地理学を研究するなかで，著者が伝統的文化地理学の伝播論や文化生態学の限界を自覚して，新文化地理学のアプローチを取り入れるようになった経緯が説明されている。朝鮮文化を様々な形で構造化し，それに表現を与えている社会関係として，本書の各章で重視されているのが，支配階層（儒教思想のもとではさらに一般化されて男性の年長者）である両班と，常民をはじめとする従属階級との関係である。文化地理学的観点からすれば，文化景観または風景は，支配階層のイデオロギーの文化的またはシンボル的戦略であるとともに，従属階層の抵抗戦略でもある。著者がフォークロア研究の必要を痛感しているのも，その理解なくしては民衆文化にある抵抗の側面，あるいは風景に表現されているヘゲモニー状況を読解できないからである。

第1章は「宗教景観」と題され，安城邑のカトリック教会，安東周辺の儒教学校，ソウルの永登浦區のプロテスタント教会，そして通度寺，および曹溪宗の根本道場である松広寺が取り上げられている。仏教とキリスト教は宗教と見なされ，全人口の半分がそれらの信徒であるが，朝鮮半島の人々の社会構造と人びとの行動に大きな影響を与えている儒教は，通常，宗教と考えられていない。しかし歴史的にみれば，14世

紀末以来の李朝約500年間は，支配階層によってもっぱら儒教が奉じられ，民間信仰としてのシャーマニズムは，社会的には従属階層によって担われ，地理的には辺境において根強かった。このような指摘から，従属階層もまたイデオロギーを生産するという，グラムシに発し，現代のカルチャル・スタディーズの重要な分析枠組みになっているヘゲモニー論を，著者が自家薬籠中のものにしていることがわかる。キリスト教は19世紀末以降のものであるが，当初カトリックが農村部に根付き，プロテスタントは都市部で目立つ存在であったという著者の指摘は興味深い。宗教景観に関しては，その性格上，歴史地理学的なアプローチが主になっている。松広寺は朝鮮戦争中，主要な建物が共産ゲリラによって焼かれ，オリジナルな形でのその再建は困難であるという理由が述べられている。また李朝時代に，風水思想と結びついた儒教によって建物の配置が影響を受けたことも指摘されている。

「フォーク景観」と題された第3章で取り上げられているのは，シャーマニズムを含む民間信仰で，前章で分析されているソフィスティケートされた宗教が，いずれも外来のもので，一般にエリート階層のものであるのに対し，このフォーク景観に表現されているのは土着的な信仰であり，従属階層あるいは弱者によって担われてきた。韓国に統計上20万いるとされているシャーマンの大部分が女性であることに，このことは如実に示されている。なかでも鶏龍山はシャーマンにとって重要な祈りの場所であり，多くの堂（tang，必ずしも建物があるわけではなく，神が宿ると信じられているオープンスペースである場合もある）が存在する。ここで注目されるのは，高麗時代の仏教および李朝時代の儒教の側からの弾圧から生き延びるために，シャーマニズムが仏教あるいは道教の影響を受けたイコンと結びついているということである。済州島あるいは黄海に浮かぶ島でも，小黒山島など儒教の影響が少なかった遠隔の島に，民間信仰が多く見られる。またこの章を読んで，韓国の民俗学研究が，近年，研究成果の豊かな蓄積を生み出していることがわかる。

第4章は「言語景観」と題され，ここでは方言に関しての等語線と移行（あるいはハイブリド方言）帯の問題，やはり基本的には言語地理学的な考察に属するがいくつかの地名が考察されている。朝鮮語を理解しない私には，この章に関してなにかを言う資格がないが，漢字に起源する多くの地名と，朝鮮語の意味を漢字に置き換えた朝鮮地名以外に，より良い意味を求めて，漢字表記が「串」→「花」→「華」と変化し，かつそれらが決して漢字の意味を持つのではなく，美しい，すばらしい場所として突起した地形を意味しているという指摘を読んで，和地名と漢字表記の場合に，類似の変遷がなかっただろうかという関心をそそられた。智異山およびそこにある老姑壇に関する考察も面白い。ここでは明記されていないが，著者にはジェンダー論的視点が根底にあると考えたい。この章でなされているアプローチは，伝統的文化地理学における culture area の同定であるが，culture area の意味を検討し，これと景観概念との関連，あるいは宗教や民間信仰に関しての culture areas の同定は，結論部分に相当する第7章でなされている。

著者による新文化地理学的なアプローチの有効性が遺憾なく発揮されているのは，農村景観を取り扱った第5章と，都市景観を取り扱った第6章においてであろう。農村景観について言えば，文化と権力との関係が非常に複雑で，特に儒教の家父長制的イデオロギーは，農村景観に深い刻印を残している。しかし両班の家父長制が卓越する村落と常民の村落とに共通して，オンドルと木のベランダが朝鮮半島の民家を特徴づけているし，聖なる場所および防風林の役割をも果たす人工林に，風水思想の影響が見られる。著者が得意にするフィールドである湖南平野の灌漑水利網の発展過程が，事例として詳しく記述されている。李朝時代にすでに水利工事がなされていたが，万頃江，続いて東津江流域の大規模な水利網が建設されたのは，日本の本土に米を供給するために，植民地当局の手厚い援助を受けた日本人地主によるものであった。そのような経緯のなかでの村落社会の変貌および現状についての詳しい記述は，残念ながらない。

都市景観については，事例としてソウル，清州および慶州が取り上げられている。王朝都市としてのソウルについては，日本では風水思想の影響が強調されることが多いが，著者は，李成桂による王都建設に影響を与えたのは，中国の『周禮考工記』と風水思想の双方であって，二つの都市計画原理がまざりあって都市景観をかたちづくった点で，ソウルはユニークであると指摘している。景福宮は当初500の建物からなっていたが，16世紀末，秀吉の侵略によってこれらは焼失し，1865年から1872年の間に約200の建物が再建されたが，日本統治を経て残ったのは10(柳宗悦の努力によってとり壊しを免れて移転された光化門を含む）だけであったことを，ソウルを訪れる日本人は常に想起しなければならないであろう。ソウルの景観の植民地化，あるいはコロニアル文化政策の刻印としては，朝鮮王朝の権威と伝統的風水思想にシンボル的に挑戦して，勤政殿前に建設されたアメリカ風ルネッサンス様式の朝鮮総督府が有名であるが，著者は新しい道路網の建設，日本人が多く居住した南山（風水思想による聖地の一つであった）地区の開発など，ソウルのコロニアル景観の形成を見事に分析している。同様のことが，李王朝の故地であった清州についても言えるのであって，そこでは，風水思想に基づいて与えらえていた場所の意味が，まず日本人商店の進出によって，次いで日本の植民地当局の手によって，意図的に破壊されたのであった。新羅の首都であった慶州の場合には，高麗王朝によって，新羅のイコノグラフィーが入念に消し去られ，さらに李朝時代には，まったく新しい景観が，場合によっては新羅時代の古い景観を儒教的観点から再解釈することによって，押しつけられたのであった。同時に，李朝時代においても，たとえば古墳を風水思想から特別の意味を持った山として解釈するような形で風水思想は生き続けたのであった。

最後の章では，新文化地理学的観点から，ここまでの諸章で考察された事例をまとめるだけでなく，知識，権力および景観が複雑に織りなして場所のシンボル的な意味を作り出すのみでなく，それが集団，たとえば両班階層のアイデンティティのよすがになっているという指摘のように，理論的にさらに踏み込んだ記述も見られる。支配階層と従属階層の空間的戦略は，両者の非対称的な権力関係を反映して非常に異なるので，ある景観の culture area を同定するためには，伝統的文化地理学の伝播理論のみでなく，社会関係の反映として文化を見る新文化地理学のアプローチをとり入れた統合的文化地理学の観点が必要であることが，最後に主張されている。

巻末には，事項索引のみでなく，必要に応じてハングルと漢字をそえた用語のグロッサリーと地名索引がつけられていて，とくに漢字文化圏の私たちには便利である。はじめに指摘したように，著者の学問的野心と自負が横溢した書物である。ひるがえって日本の状況を反省すると，個別研究として深められたものは多くあっても，新文化地理学的観点から，日本各地の文化景観を全国的に読み解いた英文の書物がないことを痛感するのである。　　（竹内啓一）

福井憲彦・陣内秀信編『都市の破壊と再生―場所の遺伝子を解読する―』

Norihiko Fukui and Hidenobu Jinnai eds.：*Destruction and Rebirth of Urban Environment*
相模書房　2000年　293p.

歴史学者の福井憲彦と建築学者の陣内秀信の編集による本書は，編者あとがきに記されているように，都市史にまつわる共同研究（1997年文化科学高等研究院による「場所の破壊と再生」）であるが，戦争の時代であった20世紀の都市という場所の破壊とその再生に注目し，21世紀への課題を提示した世紀末ならではの出版物となっている。執筆者陣は，多くが都市計画や都市史を専攻としているが，海外の研究者を交え，また使用言語も日本語のほかに英語（第6章のみイタリア語）を併記している点など，国際的スタンスをとる著書となっている。